

## 「老いてこそ人生」

著:石原慎太郎 (2002年発行 幻冬社)

9/9/2012 北村社会福祉士事務所

今般、標題の本を読む機会があり、その一部を抜粋しております。ぜひ、読んでいただければと思います。

### 【序章】

- ・ 老いは、時間をもたらす必然の結果であって、それを拒否したり防いだりする事の出来る人間なんぞこの世に絶対いません。
- ・ 誰しも年はとりたくない。誰しも老いたくはない。しかし誰しも必ず年をとり老いていくのだ。そんな当たり前のことが前にしてなんでくよくよしたり、怯えたり、腰が引けたりすることがあるのだろうか。正面きって向かい合いこちらから仕掛けていけば、こんなにやり甲斐生き甲斐のある人生の時は他にもあるものではないのです。

### 【第一章 なぜ走るのか】

- ・ 「色即是空、空即是色」、つまりすべてのものごとは必ず変化するのだ、それこそが人間にとっての絶対の真理だと教えたのは、お釈迦様でした。お釈迦様こそ、数多い宗教者の中で「時間」について、その「時間」のもたらすものについて初めて考えた人です。  
この世で、誰も時間に追いつくことなぞ出来はしない。  
人間の人生、つまり「存在」を洗って流れる時間を神様といえども堰き止めることなど出来はしません。
- ・ 時間の流れの速度に違いのありようはずはない。一時間は一時間、一年はあくまで一年。つまり時はいつも同じ速度で流れている川のようなものだが、その川のほとりを流れに沿って歩いていく人間の歩みの速度は年とともに肉体が老化してだんだん遅くなっていき、遅くなっていく歩みの速度と川の流れの速度の相対的な差からして、同じように歩いているつもり人間にとっては、川の流れがにわかに速くなったような気がするのだと。  
なかなかうがった、うまいたえようだと思ふ。
- ・ 若い頃私たちはよく、健康な肉体にこそ健全な精神が宿るといわれたものです。それは真理だと思う。だから、それが真理であるが故にその逆説もあり得るのです。つまり、ある年齢になると今までとは逆に、健全な精神が老いていく肉体を守ってくれるのです。

### 【第三章 色即是空】

- ・ 人生というものは変化そのものなのです。そしてその変化の先には「死」という消滅があるのだと教えた人こそ、あのお釈迦様でした。
- ・ 彼にいわせると、世の中に出て成功の兆しを感じ張り切っていた二十代には、男の武功としての女に関する自慢話ばかりだったが、三十代になればそれぞれ結婚して生まれた子どもの話となり、四十代にもなればいろんな健康法やよく効く漢方薬の話題、さらに五十代となれば病気の愚痴やどこかの腕の良い医者の情報などなど、そして還暦を過ぎると今日この頃のように仲間の訃報について、ということでした。 以上